

教育における伝統文化の役割に関する一考察

A study on the role of traditional culture in education

次世代教育学部国際教育学科

渡邊規矩郎

WATANABE, Kikuro

Department of International Education

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：温故知新・彰往考来，信仰の森と水，お水取り，人と自然の共生，歴史・伝統文化

要旨：温故知新・彰往考来は，今を生きる者にとって最も大切なことである。過去から現在に至る筋道を知らなくては現在では分からない。現在が分からないとこれから未来へと進むことができない。過去というものを確実に理解して，そして，自分の歩んで来た道を振り返ることによって，将来を決定しうる。記憶を喪失した人も，記憶を取り戻した時点で，初めて前へ進むことができる。過去を本当に知り得て，はじめて未来への道が開けていく。過去と現在の延長線上に未来がある。先人，現代人，子孫の声を聴くことが不可欠な所以である。本研究ノートでは，日本の伝統文化の源流としての森と水を軸にしなが，教育における伝統文化の役割を考察する。

1. はじめに

戦後の教育は目に見えるものばかりを追いかけてきたのではないか。学力にしても目に見える，ペーパーテストで測れるものだけで評価してきた。見えない学力として，関心・意欲・態度が評価の観点で重視されたのは，つい最近のことである。しかし，現状では，いざ評定となると，依然として試験の成績に比重が置かれている。また，見つめるものも目先のことばかり。遠くを見つめることが欠けている。悠久の歴史の流れに身をおいたり，生命の不思議，宇宙の神秘に思いをはせたりすることがいかに大切なことが忘れ去られているように思えてならない。

現状を見ると，将来が悲観的にならざるを得ない。しかし，歴史や伝統文化には復活がある。伏線はマイナスのものばかりではない。日本の伝統的な伏流水，地下水脈は，革命により断ち切られない限り脈々と流れ続けていく。

教育基本法の改正により，歴史・伝統文化の尊重，古典重視，さらには戦後，タブーとされてきた宗教的情操教育の必要性が強調されてきているのは明るい兆しである。

日本の伝統文化，生活様式を育んできた森を次世代に残していこうと，「ヘリテージ（遺産）の森」構想が進んできている。また，東アジアに広がる信仰の森

を研究する「社叢学会」も発足して10年余を経過し活発な活動を展開している。

遅きに失した感もあるが，心ある人たちのたゆまぬ地道な日常活動，長年の働きかけの成果であり，今後は，この流れを推進していく国民の意識と意識の高まりが大切になる。また，各地域に連帯した具体的な支援・盛り上がり期待される。

2. 森と水にみる人と自然の共生

10年前の平成14年4月より学校完全週5日制が導入され，それに伴う新学習指導要領が完全実施となり，地域の方々の支援を得て行う「総合的な学習の時間」がスタートした。学校完全週5日制のもとでは，地域の教育力が期待されているが，とりわけ各地域にあって精神文化の拠点ともいべき神社・寺院等が果たす役割は極めて大きい。事実，「総合的な学習の時間」では，その活動の場に神社や境内，鎮守の森を提供して学習を支援している実践事例もみられる。

例えば，かつて大阪教育大学附属池田小学校では，環境教育を課題にした「総合的な学習の時間」の実践「社寺林は何を語るか」の学習を行い，注目された。この実践は，池田周辺で質の高い自然林が残っているのは，神社やお寺の裏山であることに気づき，そのわけが日本の伝統的自然観に根ざした森の見方に由来し

ていることを実感的に理解し、現在まで残存する社寺林が今の私たちに何を語りかけているかを考えることを学習の目標にしたものである。奈良の三輪山と春日山の神体山を例に、山や古木を神として崇めた昔の人の自然観に学んだり、『となりのトトロ』の言葉「昔、人と木は仲良しだったんだよ」を考えたりする中で、自然のあらゆるものからのメッセージを受け止め、声を聴く耳を持つことをみんなで考える非常に質の高い取り組みであった。

学校、地域、家庭における徳育面の教育力が特に衰退している昨今、日本の伝統文化、精神文化を根源的に支えてきた関係者の方々の出番と考える。戦後60数年ぶりに改正された教育基本法に基づく新しい学習指導要領が実施に入ったこの時期を好機と捉え、各層各人が、あらゆる段階で教育や学校に対して発信し、共に教育の再建、次代の国民づくりに寄与すべきときではなからうか。

筆者は、日本の伝統文化の源流である森と水に関心を持って研究を重ねてきたが、これを教材に組み入れることによって、日本のこころを有する真の日本人の育成を図る糸口になると考える。

例えば、鎮守の森、里山、お水とり、若水、聖水の持つ神秘力（産湯、末期の水、灌頂）、梅尾明恵上人の紀州荳磨島への手紙、芭蕉の『笈の小文』にある「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。おもふ処月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり」などは、人と自然が共存する格好の教材となる。

また、古くより「語問（ことと）ひし磐根（いはね）木根立（きねたち）草の片葉（かきは）をも語止（ことやめ）て」（「大祓詞・中臣祓詞」とか、「草木もの言ふ」（「古事記」という捉え方があり、明治天皇は「さまざまの草の声にも知られけり生きとし生けるものの思ひは」、石川啄木は「ふるさとの山に向かいて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな」と詠っている。

とりわけ「若水の信仰」は、それらを象徴する。

佐久良東雄は「父母に先づ奉れ老人の若がへるちふ今朝の若水」と詠み、島崎藤村は「くめどつきせぬわかみづを きみとくままし このいづみ／かわきもしらぬ わかみづを きみとのままし このいづみ／か

のわかみづと みをなして はるのこころに わきいでん／かのわかみづと みをなして きみとながれん 花のかげ」と詩っている。

そこには、神と人をつなぎ、自然界と人間界とをひとつにする道が、深い精神の智恵によって、そこに設定されているように思える。

『万葉集』の「美わし」の舞台は、大和より吉野、とりわけ吉野川の流域に移り、川と山の取り合わせになる。『万葉集』には、「さやか」「きよらか」浄・明・亮・清という言葉が多く出てくる。「清」は30例で全体の3分の2にも及んでいる。清らかな水は、源（水の湧く原）の美しさ、清・明・直に通じる。曹洞宗の開祖・道元は、源を求めて白山の麓に永平寺を創建した。「澄む心」を求めて水（源）に登って行ったのである。

古の人たちにとっては、水や森（山）そのものがカミ（神）であった。「山は賢をこのむ実あり、聖をこのむ実あり」（道元）や、白山水、杓底の残水などは、それを象徴しよう。クリスマスツリーのもみの木、門松もこれに加えることができる。

北畠親房の『神皇正統記』に「天にせくぐまり地にぬきあしし、日月の照すをあふぎても、心のきたなくして光りにあたらざらん事をおち、雨露のほどこすをみても、身のただしからずしてめぐみにもれん事をかへりみるべし。朝夕に長田狭田（さだ）の稲のたねをくふも皇恩なり。昼夜生井栄井（いくみさくゐ）の水のながれをのむも神徳なり」と記しているが、これは当時の人々に共通したありようであった。

すなわち、「人々は、自然を敬愛し、熱愛し、自然の中に、自然と共に生きて来た。人々は、天に日月を仰いで之をおろがみ、地に山川をかしこみ、一木一草にも敬あって、毫も之をおろそかにしなかった。人々とは、誰であるか。それは、我等の父祖にほかならぬ。父祖の香り高き足跡をたどって思ふ事、数多い中の一つは、そこに驕慢がなく、我意が無く、残酷が無い、といふ事である。驕慢、我意、横着、残酷、それは一言にまとめて云へば、他を凌ぐもの、他を征服する心である。我等の父祖は、その住む日本列島を、異質の物とは考へず、自分等と同じように、神の作り給うたもの、否それ自体、神であるとして、此の国土を敬愛し、熱愛して来た」（平泉澄『父祖の足跡』）のである。

村尾次郎は『伝統意識の美学』の中で「岩間から噴出す真清水が、数々の運命に遭遇しながら遂に海へと流れこむまでの旅程は、そのまま文明史物語である。

水の文明とは、その真清水が旅路の果てに人工浄水となって海水に混るまでの段階であると言ってよい。真の文明は、人間が資源として利用した物質をできるかぎり元の姿に戻し、これを自然に返還しようとする精神と、これを断行する力とによって築かれるであろう」と述べている。古代文明が森を砂漠化してしまったことを思うとき、森の保護とともに水の問題も真の文明への問いかけである。

国土の7割を森林が占め、世界に類をみない美味しい水に恵まれた日本においては、自然の恵みが当たり前と受け止められがちなのに、意識的に考えるべき問題であろう。

3. お水取り～フィールドノートから～

奈良の「お水取り」が終わると春が来る。関西の人々は、毎年この春の兆しを待ちわびる。その「お水取り」は、3月12日の深夜に行われるのが恒例になっており、筆者は平成20年の3月12日の深夜から13日の未明にかけて、東大寺二月堂の前の閻伽井屋の石畳に約3時間座って「お水取り」を目の前で拝観した。実に荘厳で神秘的な光景だった。

この有名な東大寺二月堂の「お水取り」は修二会という儀式の中のひとつだが、その修二会の練行の模様も「お水取り」に先だって拝観する機会に恵まれた。以前、NHKテレビが初めて二月堂の堂内に入り、修二会の一部始終を長時間報道したことがある。それを視聴して以来、修二会を一度は拝観したいと思っていたところ、縁あって、東大寺の塔頭・清涼院の森本公譲住職のお力添えにより、念願の修二会拝観がかなうことになった。

【東大寺二月堂の「修二会」】

華嚴宗大本山・東大寺の公式ホームページによると、二月堂の修二会は、天平勝宝四年（752）、東大寺開山良弁僧正の高弟であった実忠和尚が始めたもので、それはちょうど大仏開眼の年に当たる。以来、平成22年は1,259回を数える。

この法会は、現在では3月1日より2週間にわたって行われているが、もとは旧暦の2月1日から行われていたので、2月に修する法会という意味を込めて「修二会」と呼ばれるようになった。また、二月堂の名もこのことに由来している。

行中の3月12日深夜（13日の午前1時半頃）には、「お水取り」といって、若狭井という井戸から観音様にお供えする「お香水」を汲み上げる儀式が行われ

る。また、この行を勤める練行衆に、道明かりとして夜毎、大きな松明に火がともされる。このため、「修二会」は「お水取り」「お松明」とも呼ばれるようになった。

12月16日（良弁僧正の命日）の朝、翌年の修二会を勤める練行衆と呼ばれる11名の僧侶が発表され、明けて2月20日より別火と呼ばれる前行が始まり、3月1日からの本行に備える。そして、14日まで27ヵ日夜（2週間）、二月堂において修二会の本行が勤められる。

【連綿と引き継がれた「不退の行法」】

3月7日夕、二月堂を真正面に見上げる清涼院に到着。案内された客間には春日大社の岡本権宮司と巫女さんたちも同席されており、森本住職から御尊父の森本公誠・東大寺長老（第218世東大寺別当・華嚴宗管長）が書かれた「お水取り」のパンフレットをもとに簡単な説明を受けた。

印象に残ったのは、東大寺は、その長い歴史にあって、治承4年（1180）における平重衡、永禄十年（1567）における三好・松永のそれぞれの兵火によって、二度までもその伽藍の大半が灰燼に帰してしまうが、そうした東大寺の危機存亡の時ですら、修二会だけは「不退の行法」として、1200有余年の間、一度も止むことなく、連綿と今日に至るまで引き継がれてきた。正倉院の御物が、国際色豊かだった往時の文化を偲ぶよすがとすれば、修二会は、奈良朝以来の伝統的な仏教儀礼を偲ぶことのできる一大宝庫である。しかも、それだけではなく、その時代々々の国家の安寧や国民の幸福を願うという修二会の主旨そのものから、常に現代の人々の心の中に生き続けてきた儀礼であるともいえる。

修二会の正式名称は「十一面悔過（けか）」。「十一面悔過」とは、われわれが日常犯しているさまざまな過ちを、二月堂の本尊である十一面観世音菩薩の前で懺悔することを意味する。練行衆は、自らの罪障はもちろんのこと、他のすべての人々の罪過も代わって懺悔し、人々の幸福を観世音菩薩に願う。練行衆は、いわば観世音菩薩と人々の間の媒介者の役を果たすことになる。したがって、練行衆はよほど覚悟してかからねばならない。それが練行衆の修行となるわけである。

修二会は、1ヵ月近くに及ぶ長期の行事だが、前行の別火で練行衆は、戒壇院内に臨時に設けられた別火坊に参籠し、普段の生活を断ち切って精進潔斎し、しだいに心身を浄めていく。全員大広間に集まって起居寝食をともにし、湯茶は制限され、私語は許されず、

火の気は廊下の火鉢の炭火だけ。2月下旬という厳しい寒さのせいもあって、たいへん窮屈な思いをするという。

森本住職のお話をお聞きしながら、修二会は神社における「大祓式」と同じようなものだったことである。

【練行衆の道明かりとしての「お松明」】

そろそろ「お松明」が始まるということで、清涼院の庭に出た。すでに二月堂の前は、人、人、人で埋めつくされている。塔頭の庭からは、人の頭越しでなく、真正面に二月堂が丸見えなので、まさに特等席である。

「お松明」は本来、二月堂に上堂する練行衆の道明かりとして灯されるので、12日の籠松明が有名だが、修二会期間中の3月1日から3月14日まで毎日あげられている。11名の練行衆が一人一人、二月堂での行のために上堂するための道明かりだが、「処世界」という役はすでに準備のため上堂しているので、「お松明」は必要なく、通常10本の「お松明」があがる。ただ、12日だけは、すべての練行衆が上堂するので、11本の「お松明」があげられることになる。夜7時、次々に点火された大松明が登廊を経て二月堂の欄干上に姿を現すと、二月堂下の善男善女は、火の玉となった松明を見て息をのみ、燃え上がる炎、飛び散る火の粉の美しさに歓声があがる。

もっとも、この炎のショーは、練行衆の道明りで用済みになった松明の火を欄干に出て消す作業が大きなパフォーマンスになったということだが、それはともかく、見事な光景であった。

【二月堂内でいただいた一滴のお香水】

「お松明」が最後にさしかかるところ、塔頭を出て、森本住職の先導で二月堂の登廊を上がり堂内に入った。堂内の狭い外陣は講社などの特別拝観者であふれんばかり。立ったまま、格子の隙間などから、菜種油の燈明に照らし出される修二会の練行を4時間余り、そして、夜が更けて内陣の間近に座って1時間余り拝観し、練行衆の行を呼吸するがごとき貴重な体験をすることができた。その日の行の終わり頃、お坊さんから柄杓でお香水を一滴、手のひらにいただき口に入れたときは、有り難さがこみ上げてきた。甘露とはまさにこのことかと思ったことであった。ご本尊の十一面観世音菩薩に国の平安をお祈りした。

修二会を拝観した7日は、「走り」という行事と、ご本尊のうちの小観音の出御、礼堂への安置が見られ幸運であった。

「走り」と呼ばれる行事は5日、6日、7日と12日、13日、14日のそれぞれの半夜の時のあとに行われる。これは実忠和尚が靈感を得て兜率天の菩薩たちの修行をまのあたりにし、これを地上界に遷そうとしたところ、「天上界の1日は人間界の400年に当たるから無理だ」と言われたので、「それでは走ってでも勤めます」と答えたことに由来しているといわれる。練行衆たちは袈裟や衣をたくし上げ、内陣を走り廻って最後に礼堂で五体投地をし、自分の席に帰っていく。末座の練行衆が帰ったあと、堂司から一滴の香水をいただくが、昼食のあと少しの飲食も口にしていない練行衆の身には、まさにこれは甘露なのである。

二月堂のご本尊は十一面観世音菩薩だが、実は二月堂内には二軀の観音像が安置されている。一軀は大きいので通称「大観音」、もう一軀は小さいので「小観音」と呼ばれているが、いずれも秘仏とされている。小観音は御厨子に納められていて、3月7日の日没後、練行衆の手によって内陣より出御、礼堂に安置される。

拝観を終えて二月堂を出ると、清々しい気持ちが体内に充満していた。

【荘厳で神秘的な「お水取り」の儀式】

いよいよクライマックスの「お水取り」である。

二月堂の前の坂を下った右手に重要文化財「閻伽井屋（あかいや）」があり、ここが「お水取り」の舞台。この閻伽井屋は、修二会に際し、毎年3月12日（13日午前1時半頃）にこの屋内にある井戸より本尊十一面観世音菩薩にお供えするお香水（閻伽水）を汲む儀式を行うところである。実忠和尚が二月堂で初めて修二会を行い、諸神を勧請した際、若狭国の遠敷（おにう）明神が献じたものであるところから「若狭井」とも呼ばれる。普段は全く水が枯れているのに、不思議なことに3月12日の深夜、お水取りの儀式が行われる時だけ、遠敷川の水が湧き出すそうだ。現在の建物は鎌倉初期に再建されたものといわれている。

「お水取り」は、12日後夜の五体の勤行を中断して始まる。「お水取り」の行列は灑水器と散杖を携えた咒師（しゅし）が先頭になり、その後に牛玉杖と法螺貝を手にした北二以下5人の練行衆が続く。13日の午前1時過ぎ、南出口を出ると咒師童子が抱える咒師松明が行列を先導し、かがり火と奏楽の中、堂童子、御幣を捧げ持つ警護役の講社の人たちや、汲んだ水を入れる閻伽桶を運ぶ庄駟士（しょうくし）も同道して、「お水取り」の行列はしつと石段を下り、途中、興成神社で祈りを捧げ、閻伽井屋（若狭井）に至る。

「お水取り」の井戸は、閼伽井屋の中にあり、当役の者以外は誰も入ることも窺うこともできない。行列が閼伽井屋に到着すると、咒師、堂童子等が中に入り水を汲む。これが2回ずつ、閼伽井屋と二月堂の間を3往復して、お香水が内陣に納められる。「お水取り」が終わると、閼伽井屋に下りていた練行衆は再び行列を組んで二月堂に戻り、中断していた「後夜の時」が再開される。

文字にするとうなるのだが、暗闇の中に松明のかがり火だけに照らされて行われるこの儀式は、実に荘厳で神秘的である。静々とした歩みは、時が止まったように感じさせる。石畳に座っているお尻の痛さや寒さは忘れ去ってしまっていた。

12日の「お水取り」で内陣に運ばれたお香水は、大きな桶の中で鎮められたのち、13日の神名帳、大導師の祈りの間に晒（さらし）の布を用いて濾され、内陣須弥壇下の石敷きに埋め込まれた甕の中に納められる。そのうちのひとつは「根本香水」を納める甕で、「お水取り」で汲まれた水を毎年追い足しして蓄えているものをいうそう。行中にこの根本香水を使用して減った分を補充するので、「お水取り」の歴史の分だけのお香水が渾然一体となったものといえる。ありがたいことに筆者も、その一滴をいただいたわけである。

この「お水取り」の「お香水」は、若狭鶴の瀬から10日かけて二月堂「若狭井」に届くといわれている。お水取りに先がけて、毎年3月2日には福井県小浜市神宮寺で「お水送り」が行われる。下根来八幡宮の神事に続いて、神宮寺僧がお堂で修二会を営み、そのあと、住職が香水を遠敷川に流す。「お香水」は10日後、奈良東大寺の「お水取り」で汲み上げられるのである。

早い機会に、この「お水送り」のフィールドワークに若狭を訪れたいと思う。

4. 肝心なことは目に見えない

正月元旦の朝は、神社境内で山裾から昇ってくる初日の出を拝む。そのとき、新年が明けためでたさを実感する。自然に初日に両手を合わせる。

では、なぜ新年が「明けましておめでたい」のだろうか。

山崎闇斎という江戸時代の学者が唱えた垂加神道に「日の少宮（わかみや）」の秘伝がある。前の日、西の空に沈んだ太陽は、夜の間にも東の空に移動し、一旦、

「日の少宮」というところで待機する。そこで、新しいエネルギーをいっぱい蓄えて、一気に豊栄昇るといのである。その太陽は、本質においては昨日の太陽と同じ。しかし、新たなエネルギーを得て、生まれ変わっている、復活をとげ、よみがえっている。昨日の太陽であって、昨日の太陽ではない。「生々発展」「日々新たなり」である。長いスパンでいえば、生物の世代交代、伊勢神宮の20年に一度の式年遷宮も同じことがいえるだろう。垂加神道では、死は言わない。生しかない。エネルギーの注入があるからこそ、衰えることはない。それゆえ、朝日は素晴らしい。だから、我々は朝日に手を合わせるのである。

大晦日には、大祓式で、知らず知らずのうちに1年の間に犯した罪穢れを祓い清め、新しいエネルギーを全身にいっぱいいただいて、元気に新年の朝を迎える。昨日の自分であって、昨日と同じ自分ではない。昨年の自分であって昨年の自分ではない。「今年1年新しい気持ちで頑張るぞ」とそんな気持ちで新年を迎える。だからこそ、「明けましておめでたい」のである。

また、この「明けましておめでとう」には、神道の「言霊（ことだま）」信仰と関係があって、新年を迎え、「この1年、あなたにとってよい年でありますように」と、よい言葉をかけてあげると、その人によいことが起こると信じられて生まれた言葉であるともいわれている。

明治天皇の御製に「めにみえぬ 神のところに かよふこそ 人の心のまことなりけり」があるが、サン・テグジュペリの『星の王子さま』にも、キツネが王子さまに「ここでみなくちゃ、物事はよく見えないんだよ」「肝心なことは目には見えないんだよ」と語りかける言葉がある。

一昔前までは、「お天道様が見て御座る」とか「ご先祖様に顔向けができぬ」などといった言葉がどこの家庭でも聞かれ、「神みそなわす」という精神でもって、人は心清く生きようとしたし、人目に触れぬ隠れたところであっても、人の道を踏み外さないように生きようと心がけてきたのである。

筆者は、平成20年4月から21年5月まで、弘法大師と「同行二人」の巡礼の旅に出かけ、四国八十八カ所と別格二十カ寺をすべて巡拝した。そして、21年6月12日、高野山に登り、天然温泉のある高野山の宿坊「福智院」に宿泊。翌13日は朝のお勤めでご本尊の愛染明王に祈願を込めたあと、杉木立の参道脇の戦国武将の墓などを見ながら奥の院、そして金剛峰寺にお参

りして四国八十八カ所巡拝の打ち止め・結願を報告した。

高野山のケーブルの上り下りで見たヤマボウシの白い花は緑に映えてとても綺麗で印象的。ウグイスの鳴き声も実に耳に爽やかだった。我が家にも鶯の鳴き声はよく聞えるが、高野山で聞く声はまた格別だった。鶯の声を耳に、弘法大師（空海）作の漢詩『後夜仏法僧鳥を聞く』を吟じながら杉木立の中を歩いた。

閑林独坐す草堂の暁 三宝の声一鳥に聞く
一鳥声あり人心あり 声心雲水ともに了々

この詩の大意は、静まり返った夜明けの林の中、草の庵に独り座していると、どこからともなく、仏法僧と啼くコノハズクの声が聞こえてくる。鳥は無心に啼いているが、人には感ずる心があって、その声に、迦陵頻伽（かりょうびんが＝極楽浄土にいるという美声で鳴く想像上の鳥）の声もかくばかりと思われる。そして、鳥の声と人の心が感応し、雲水にとけあって、永久不変の真理を看得される、というものである。

弘法大師は、仏法僧の声を聞いて、大悟徹底の境地に達したといわれる。

こうした、我が国の先人の精神生活、感性を教育の場で培い、自分の中に発見し、呼び覚ますことが伝統文化の教育で大切なことと考える。

5. むすび

我々は、人間として、しかも日本に生まれてきた。他の生物としては生まれてこなかった。そして、他の国には生まれてこなかった。さらに、それぞれの郷土のそれぞれの家の父母から生まれてきた。これは、当然のことのよう思いがちだが、よくよく考えてみると不思議なこと。たまたまの偶然と思う一方で、説明しがたい縁（えにし）を感じる。目に見えない偉大な摂理、自然の力、神様の配剤としかいいようがないものと思わざるをえないものがある。

明治維新の最も偉大な指導者である吉田松陰（1830-1859）は30歳の若さで安政の大獄の犠牲となる。その松陰は22歳のとき、藩主の毛利敬親に従って江戸へ遊学し、山鹿素水、佐久間象山らに学び、さらに東北遊学の旅に出て、水戸で会沢正志斎、豊田天功らに会う。正志斎といえば『新論』を著した当時の水戸を代表する大学者。約1ヵ月ばかり滞在して、水戸光圀（義公）以来の水戸の学風にふれて驚嘆し、「身、皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らず、何を以て天地に立たむ」という言葉を叫ぶ。今まで自分は、

日本に生まれているのだから、日本人だと思っていたが、水戸に来て学んでみて、今まで日本という国家の本質を全然理解していなかったことがわかった。日本の本質を知らないで、どうしてこの天地の間に平気な顔をして立っていることができるだろうか、これでは無用の人間にすぎない、と気づき自分を恥じ入り、真の日本人を求めて命を懸けた学問に励むのである。

「汝自身を知れ」とはデルフォイのアポロンの神殿の入口に刻まれた古代ギリシアの格言であるが、我が国の歴史と伝統文化を知ることは、自分の拠り所、立ち位置を知ることにはほかならない。

戦後60数年を経てようやく教育基本法が改正され、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」を目的とする教育がようやく復活した。

昭和天皇は、我が国が敗戦を克服し、本来の姿に戻るには300年かかると言われたという。我が国が国際社会から尊敬される「道義国家の建設」のために、教育における歴史と伝統文化の占める役割は非常に重いものがある。

引用・参考文献

- 1) 平泉澄『伝統』原書房 1985
- 2) 平泉澄『中世に於ける精神生活』錦正社 2006
- 3) 所功『「国民の祝日」の由来がわかる小辞典』PHP研究所 2003
- 4) 谷省吾『神々の山』古川書店 1983
- 5) 戸田義雄『日本の感性』PHP研究所 1994
- 6) 白洲正子『西行』新潮社 1988
- 7) 近藤啓吾『崎門三先生の学問』皇学館大学出版部 2006
- 8) 中西進『こころの日本文化史』岩波書店 2011
- 9) 上田正昭・上田篤編『鎮守の森は甦る』思文閣出版 2001
- 10) 村尾次郎『伝統意識の美学』島津書房 1987
- 11) 小林秀雄『本居宣長』新潮社 1977
- 12) 梶田叡一『和魂ルネッサンス』あすろ出版 2009
- 13) 前登志夫『明るき寂寥』岩波書店 2000
- 14) 徳富蘇峰『徳富蘇峰 終戦後日記』講談社 2006
- 15) 日本古典文学全集『古事記 上代歌謡』小学館 1992